2010

相反するイメージを表現する空間造形

Space Molding by Expressing a Contradictory Image

AD 12　工藤　伸
指導教員　佐久間　善典

1.研究目的

一つの作品から受けるイメージは人によって様々だ。一つの作品から、ある人は「新しさ」を感じ、ある人は「古さ」を感じるという、相反するイメージが伝わることもある。

制作者の意図により、一つの作品から矛盾する二つのイメージを、鑑賞者に伝えることができるのだろうか、作品作りを通してそれを研究する。

2.調査と分析

まず、いくつかの相反する言葉をピックアップし、それぞれの言葉とイメージの関連を、アンケートで調査した。その結果から造形化しやすそうな「驚き」と「落ち着き」という二つのイメージを選んだ。それぞれの共通キーワードとして、野外にある、ある程度の大きさや空間を持つ、自然や人工を感じさせるなどの要素があがった。

3.コンセプトの立案

○形や素材選びにも、相反する要素を極力活かす。
○「驚き」「落ち着き」という相反するイメージを伝えるためには、視覚的な平面ではなく、周りの空間も含めて鑑賞者が体感できる立体作品にする。
○形はシンプルでありインパクトのあるものとする。
○素材は身近な材質でありながら、あまり認識されていないものとする。

4.デザイン展開

形は、内に向かう限られた範囲としての有限と、外に向かう無限、二つのイメージを兼ね備えてもつ幾何学的な円とした。

また、鑑賞者が体感できるよう、円の直径は、人がくぐれる２メートルとした。

素材は鉄を使った。鉄はもっとも多く使われる建材でありながら、鉄そのものはメッキなどでおおわれ、直にみることは少ない素材でもある。

また、グラインダーで削るというドローイング彫刻の手法を取入れ、円の表面には、冷たいイメージを持つ無機的な鉄に、有機的かつ動的なイメージを与えた。裏面は錆びさせることにより、無機的かつ静的なイメージを与え、表裏の対比を狙った。

5.完成図

6.結論

作品を制作し、野外に設置したところ、空間も含めて、コントラストが強調され、当初の目的である、相反するイメージを伝えることができたと確信した。作品の大きさと、シンプルな形状から、多くの人が「驚き」を感じてくれたようだ。また、有機的なテクスチャーから、安心感や「落ち着き」をも伝えることができた。

また、鏡面に近い表面の映り込みが、周りの空間を吸収し、観る人も含めた空間を再構築するような効果も出せた。

表面処理は、裏面の錆をうまく出すことが難しかった。錆というものは時間がかかりながら徐々に鉄の内部から出てくるもの、すなわち、それは鉄そのものであることも解った。

また、作品を円形に保ちながら立脚させることにも苦労した。単純な形であるからこそ、正円にすることが難しく、硬度や重量も含め、鉄という素材に関して色々学ぶことができた。これからの作品創りに生かして行きたい。

7.参考文献

『美術手帳』　2006　3月号　美術出版社
『日本彫刻の近代』　2007　淡交社
『造形美論』　高村光太郎　1942　筑摩書房